咸臨丸、荒波の太平洋を往く

ノンフィクション作家　合田一道

咸臨丸が日米修好通商条約批准の随伴船として、副使木村摂津守喜毅（きむらせつつのかみよしたけ）を司令官に、勝安房（海舟）を教授方頭取（艦長）に、浦賀を出帆したのは安政7年（1860）1月19日。太平洋の荒海を越えてアメリカ西海岸に至り、往路はハワイを経由して5月5日、帰国した。この間の3月18日に年号が万延に変わった。遣米使節の正使一行が帰国したのはこの年9月である。今年はこの航海から150年。動乱の幕末期に、咸臨丸がたどった航跡を振り返る。

日米通商条約調印に正使を派遣

安政5年（1858）4月、幕府大老になった井伊直弼は、将軍後継に紀州家の徳川家茂（後に慶福から改め）を推し、一橋家の徳川慶喜を推す大目付や勘定奉行らを次々に罷免した。そのうえ勅許のないまま日米修好通商条約に調印し、憤慨して押しかけた一橋派の前水戸藩主徳川斉昭（烈公）、子息の藩主徳川慶篤、尾張藩主徳川慶勝、それに同調した福井藩主松平慶永（春嶽）らを処分した。ほどなく家茂が将軍職に就いた。

孝明天皇は憤慨し、「戊午の密勅」を水戸藩などに下した。井伊は構わず志士ら40数人を次々に逮捕し、吉田松陰ら8人を死罪または獄門、切腹に処した。〝安政の大獄〟である。

そうした最中の安政6年（1859）秋、下田のアメリカ総領事ハリスから、幕府に対し、日米修好通商条約締結の日本人使節団を乗せて渡米するポーハタン号が近々来航するので、正使以下の乗組員を早くまとめるように、と要請がきた。

幕府は、使節正使に外国奉行の水野筑前守忠徳（みずのちくぜんのかみただのり）、副使に同じ外国奉行の永井玄蕃頭尚志（げんばのかみなおむね）、目付に津田半三郎、加藤正三郎、以下乗組員総勢80人とする旨、返事をした。ハリスは、同船にはアメリカ人乗組員が多数乗っているので、もっと減らすように、と伝えた。

幕府内部に、それなら海軍の航海練習の意味から、別船を仕立てるべきだ、との意見が出た。だが長崎海軍伝習所のオランダ教師団は、無理であると反対したので、老中はそれを却下した。

たまたま副使になるはずの永井玄蕃が、将軍継嗣問題で井伊の逆鱗に触れて蟄居になった。後任の加藤正三郎も、その直後に起こった横浜のロシア艦乗組士官兵の殺傷事件で、正使に予定されていた水野筑前とともに左遷された。

幕府は改めて使節団の正使に新見豊前守正興（しんみぶぜんのかみまさおき）、副使に村垣淡路守範正（むらがきあわじのかみのりまさ）、目付に小栗豊後守忠順（おぐりぶんごのかみただまさ）を任命した。

外国奉行から軍艦奉行になり正使をはずされた水野は、日本人乗組員だけで遠洋航海訓練を体験させたいとして、

「別船には本船に乗る人数の一部と荷物を引き受ける。正使に支障が起こった場合、代わり得る副使を乗せる船とする」

と力説し、何とか承認を取りつけた。

特集 咸臨丸太平洋横断150年

二転三転、咸臨丸に

水野は、随伴船となる別船に朝陽丸を指名した。副使には長崎海軍伝習所二代所長を務めた木村図書（後に摂津守）、教授方頭取（艦長）に同伝習所一期生の勝麟太郎（海舟）を想定し、乗組員の編成に着手した。

ところが水野がこんどは軍艦奉行兼務のまま西ノ丸留守居に左遷される。後任の井上信濃守清直は、幕閣が必ずしも別船に賛成でない空気を察知し、正使一行の荷物を少しでも多く引き受けるには、別船を朝陽丸より一回り大きい観光丸に変更したいとして、正式発令にこぎつけた。これが11月18日。

ポーハタン号に乗り込む正使新見豊前守正興及び副使、目付の3人と、別船に乗り組む木村図書は11月24日、江戸城に登城した。木村は軍艦奉行に任ぜられ、2千石を賜り、従五位摂津守に叙せられた。随伴船となる別船の乗組メンバーも勝麟太郎以下が決まった。勝をはじめ教授方、教授方手伝はすべて長崎海軍伝習所の卒業生である。水主、火焚なども決まった。

この直後に、横浜に滞在中のアメリカ測量船フェニモア・クーパー号の船長ブルック大尉ら乗組員を、別船に乗船して帰国させ、その間に日本人乗組員に航海術を学ばせる案が出た。同船は太平洋を航海して清国、朝鮮を経てこの夏、来日して日本周辺の測量中、暴風雨のため難破、船を失い、帰国する船便を待っていたのだった。

だが攘夷思想の高まるなか、血気にはやる咸臨丸乗組士官たちは、外国人の助けを借りて航海するのを嫌った。勝麟太郎は、

「アメリカ軍人が日本に滞在中、幕府から懇篤な待遇を受けたので、この船に同乗してわれらに助力したい、と願っているので、幕府の許可を得て同乗させるものである」

と理屈をつけて、たぎり立つ士官らを押さえた。

ブルック大尉らが品川沖で出帆を待つ観光丸を視察した。観光丸は10年前にオランダで建造された船だが、ブルック大尉は一目見るなり、

「この船で遠洋航海するのは難しい。他のスクリュー船に替えてほしい」

と注文した。

12月20日、ポーハタン号が横浜に入港してきた。ブルック大尉らは再び船の変更を求め、困り果てた外国奉行は、もとの朝陽丸に戻そうとした。だが朝陽丸は長崎に向けて出航中で、この時、横浜にいたスクリュー船は咸臨丸だけだった。幕府は急転、咸臨丸に決定した。この日が12月24日。出帆間近の思わぬ逆転劇だった。

この突然の別船変更は乗組員を面食らわせた。観光丸に積み込んでいた食糧や荷物が急ぎ降ろされ、端舟で咸臨丸に移された。米75石、醤油7斗5升、味噌6樽、砂糖7樽、焼酒7斗5升、炭150俵、薪1350杷―。勝麟太郎は怒り、

「今米人等の説によりて他の軍艦と為せば万事甚だ不都合ならん」

と不満をぶつけたが、この主張は通らなかった。

咸臨丸の乗組員は107人に

別船―随伴船となった咸臨丸の乗組員に、新たに通弁（通訳）主任として中浜万次郎が追加された。漂流してアメリカ捕鯨船に救われ、10年間を経て帰国した人物である。同乗するアメリカ軍人との会話や、目的地に到着後の対応を考慮したのはいうまでもない。

総勢は別表の通りで、日本人96人、アメリカ人11人、合計107人。名簿が2人少ないのは、奉行の従者、教授頭取の家来名が脱落しているためと思われる。船の長さおよそ50メートル、幅7メートル余り、螺旋推進器を持つ6ノットの汽船で、85人乗りだから、かなりの定員オーバーである。

初の遠洋航海だけに乗組員のほとんどは、生きて帰れぬものと覚悟した。木村摂津守は家族と水盃を交わして、1月12日夜、築地の軍艦操練所から端舟で品川沖に停泊中の咸臨丸に乗り込んだ。

勝麟太郎は風邪で高熱を出し、自宅で寝ていたが、「畳の上で犬死にするより、軍艦で死ぬるがまだまし」と思い、「妻にちょっと品川まで船を見にいく、といひ残して、向ふ鉢巻」で赴き、咸臨丸に乗り込んだ。後年の勝の『氷川清話』に見える。

13日早朝、咸臨丸は品川沖から横浜港に移り、そこでブルック大尉らアメリカ軍人を乗せ、16日昼過ぎ出帆、夕刻、浦賀に寄港し、最後の生鮮食糧品などを積み込んだ。教授方佐々倉桐太郎ら浦賀出身者

たちは下船し、家族と別れを惜しんだ。

航海中の教授方、教授方手伝の当番割りが編成された。2人組で4時間ずつ船の運用を監視し、併せて船の位置などを測量し、航海中に何らかの事態が発生した場合、即刻対応するというものである。

編成は、第1番が佐々倉桐太郎、赤松大三郎、第2番が鈴藤勇次郎、松岡磐吉、第3番が浜口興右衛門、小野友五郎、第4番が伴鉄太郎、根津欽次郎の4グループで、午前0時から午前4時までを夜半直、午前4時から午前8時までを朝直、午前8時から正午までを午前直、午後0時から午後4時までを午後直、午後4時から午後8時までを夕直、午後8時から午前0時までを初夜直とし、交替で勤務するのである。

太平洋の荒波に揉まれる

ポーハタン号の出航日が安政7年1月20日、と伝えられた。咸臨丸はその前日の出帆と決まっていたので、待ちかねていた乗組員たちは歓声を上げた。

1月19日は太陽暦で2月10日に当たる。咸臨丸の3本のマストに帆が張られた。四角い横帆や三角縦帆、梯形帆がはためく。午後3時過ぎ、咸臨丸は浦賀港を出帆した。ところが港を出て直ぐ、小さな衝突事故が起きた。これはあまり知られていないが、火焚小頭の喜八が『異国の言の葉』にこう記している。

最早我国の見納かと打眺めて名残おしくも蒸気焚立（たきたて）、御船廻し出んとする時、日本の商船に当り艫打砕き候得共、其儘にて御船を沖の方江向け御出帆に相成――

この日は季節風（西風）が強く吹きつけていた。沖合に出た咸臨丸は蒸気を用い、風に逆らいながら城ケ島沖に至り、そこから西へ向かい、深夜、大島沖から針路を南東に変えた。帆仕立役の政太郎は『咸臨丸渡米日記』（カッコ内は筆者、以下同じ）に、

岬鼻迄蒸気にて大西（風）吹き当れり。六ツ半（午後七時）に成り岬沖より西南針に而（て）走り、同夜九ツ時（午前零時）より八ツ時（午前二時）迄卯針（東針）に走（はしる）。此夜大風、不残（のこらず）帆懸（かかる）。追々大風に成る故マルセイル二ツレフ仕走（はしりつかまる）。

と記した。実は日本近海から北太平洋にかけて季節風が吹き荒れ、世界の海でも指折りの難所とされていたが、この年は20年来の荒れようだったのである。

文倉平次郎『幕末軍艦咸臨丸』によると、最初の当直についたのは佐々倉と赤松で、いきなり強烈な風波の洗礼を受けた。出帆後ほどない午後4時に鈴藤、松岡組に代わり、午後8時に浜口、小野組に、午前0時に伴、根津組に代わった。午前4時には佐々倉、赤松組が2度目の当直についている。日誌には晴雨計、寒暖計、乾湿計の数値や風向などがこまかく記載されて、天候の急変ぶりを知ることができる。

20日夜明け、咸臨丸は東北に針路をとった。潮流に逆らいながら200キロほど走って大海に乗り出したが、黒潮の急流に遮られて激しく翻弄された。乗組員たちは生きた心地もせず、死を覚悟した。

21日になると東風が北風に変わった。木村摂津守は『奉使米利堅紀行』の中で、

波浪山のごとく船中に打入、傾く事屢（しばしば）なり。

と記した。さらに22日、23日は、

雨、暁より風浪つよく舶上に打上る事不絶（たえず）、終に後檣（こうしょう）の帆を吹破らる。

雨、暁より霰降出し、風変んとして波高く動揺甚し、端船を釣たる綱切れたり。猛風弥甚（いよいよ）しく前檣（ぜんしょう）の帆を吹裂らる。

と書いた。後檣の帆とは後部の帆柱の帆、前檣の帆とは前帆柱の帆である。乗組員らが動揺したのも無理はない。教授方鈴藤勇次郎描く「咸臨丸烈風中航海図」は、難航する咸臨丸の姿を表したもので、その凄まじさを想起することができる。

船酔いで乗組員倒れる

連日の激しい風波で船酔いが続出した。真っ先に倒れたのは教授方頭取の勝麟太郎だった。勝は高熱のまま船に乗り込んだだけに、体力を消耗していたが、もともと船に強い方ではなかった。木村摂津守も自室に籠もったまま出てこない。士官はじめ乗組員もほとんどが船酔いで寝込んでしまい、食事を摂ることもできない。

ブルック大尉は早くからこれを想定し、アメリカ軍人6人を2班にわけて咸臨丸の操舵や見張りにつかせた。ブルックの『日記』にはこう書かれている。

艦長（勝麟太郎）は下痢を起こし、提督（木村摂津守）は船に酔っている。非常に荒い海で、

しばしば波が打ち込む。日本人は全員船酔いだ。

ブルック大尉によると、船酔いせずに働いていたのは教授方の小野友五郎、通弁の中浜万次郎、それに木村の従者として乗り込んだ福沢諭吉ら数えるだけだったという。従って当番割りもその通りとはいかず、しばしば「代中浜」「代浜口」などの文字が見える。

23日夜になって、あれほど吹きすさんでいた風がやみ、月まで出た。だが乗組員たちはベッドに横たわったまま。しかし24日午後になると波も穏やかになり、乗組員たちは少しずつ精気を取り戻し、仕事に就きだした。

正使らを乗せたポーハタン号は予定より3日遅れて出帆した。だが途中、季節風にたたかれて船体を損壊し、サンフランシスコ直行を断念し、急遽ハワイのサンドウイッチ島ホノルルへ向かった。これにより咸臨丸と太平洋上で会うことはなかった。

27日になってまた天候が急変した。風波が激しくなり、甲板が一面水浸しになった。『奉使米利堅紀行』は、

風西北西に変じ、夜に入益烈し、帆を畳み是を避けんとすれども、舶夫皆疲労して働得ず、舶簸揚して半ば海に沈其危いふべからず。

と書いている。

このころのことだが、勝が癇癪を起こして、江戸に帰るから端舟を出せ、と言って木村を困らせた。勝は木村より7歳年長の38歳。階級は艦長とはいえ41石取の御家人にすぎない。そんなことで木村に当てこすりのつもりで駄々をこねたのかもしれない。

咸臨丸は風波と闘いながら、北緯40度ラインを東へ東へと進んだ。速度は、漂流されて一日何キロの日もあれば、帆を巧みに使って40キロ以上も走る日もあった。

小野友五郎の推測が当たる

2月に入って風波が穏やかになった。日付変更線を越えるあたりで、船は北緯42度23分7秒まで北へ上がり、急に寒さが募った。江戸から4900キロメートルの海域である。

濃霧が晴れたので、乗組員たちは甲板に出て濡れた衣服を乾かした。だが天候は変わりやすい。2、3日経つと風波が高まり、霰雪に変わった。と思ったら天候が回復し、月が上り、美しい金波銀波を見せた、とまた急変して強烈な風波が船体をたたきつけ、食事もできないほどになった。北太平洋の荒れは想像を絶した。そんな中で持参したブタを一頭屠って食べたことが『奉使米利堅紀行』に見える。

アメリカ軍人が食事にクレームをつけたのはこの時だ。『異国の言の葉』の17日に、

今朝食事拵え出来兼候に付、亜人共申候には、ヤッパン（日本）の食事にては太洋大荒之節は食事に困り、航海出来がたく由申居候。

とある。朝食が作れないと知らされたアメリカ軍人が、日本食のまずさに不満をぶつけた、と想像できる。

アメリカ軍人と乗組員との間で、それまでも何度か悶着が起きていた。言葉の行き違いが原因だが、そのたびに中浜万次郎が中に入り、何とか収めたものの、たがいにいらいらが嵩じて、それが爆発したともとれる。

心配していた飲料水が不足してきた。勝など教授方らが調査して、あと16、7日間は持つ、として、以後は水桶に錠をかけ、小永井五八郎が鍵を預かる物々しさだった。

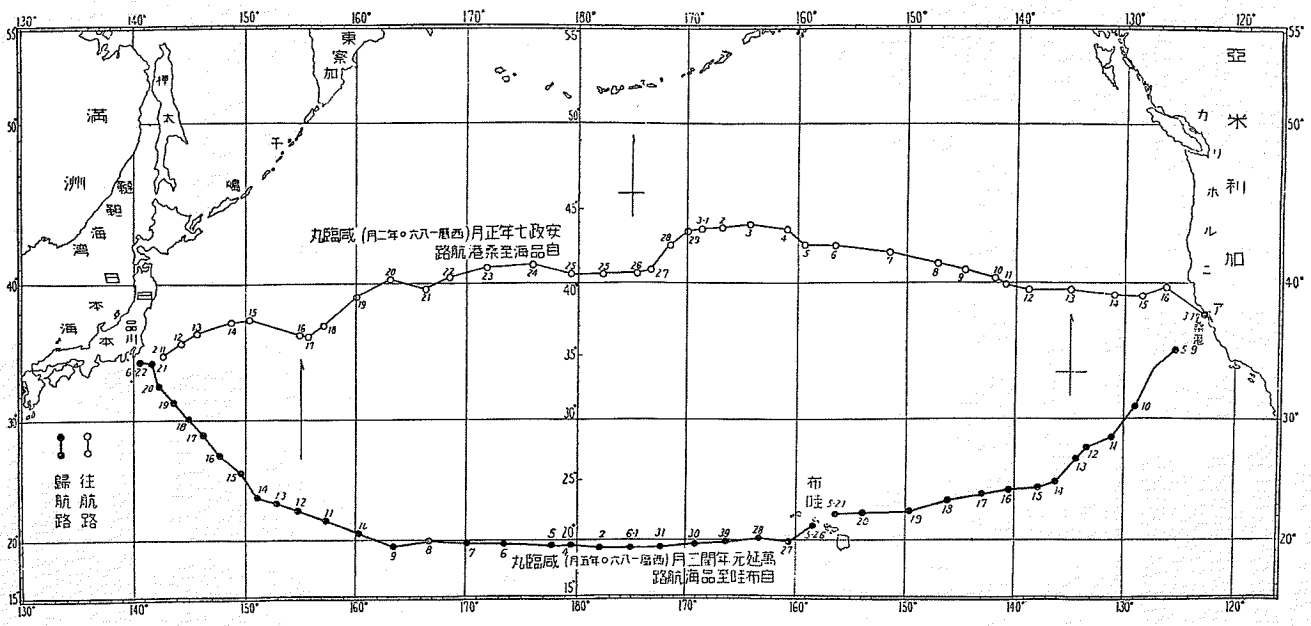
24日、教授方の小野友五郎が「アメリカ西海岸まで百二十里（約四八〇キロ）ばかり。順調にいけばあと二日で到着する」と書いて貼り出したので、船内は沸き立った。だがブルック大尉は、あと3日はかかるだろう、と否定した。

26日早朝、小野の推測通り、左手の一点にカリフォルニアの大地が望まれた。サンフランシスコはもう近い。小野の推測がブルックを凌いだというので乗組員たちは感激し、胸を張った、と赤松大三郎の『赤松則良半生談』に見える。

異文化に触れ、驚嘆

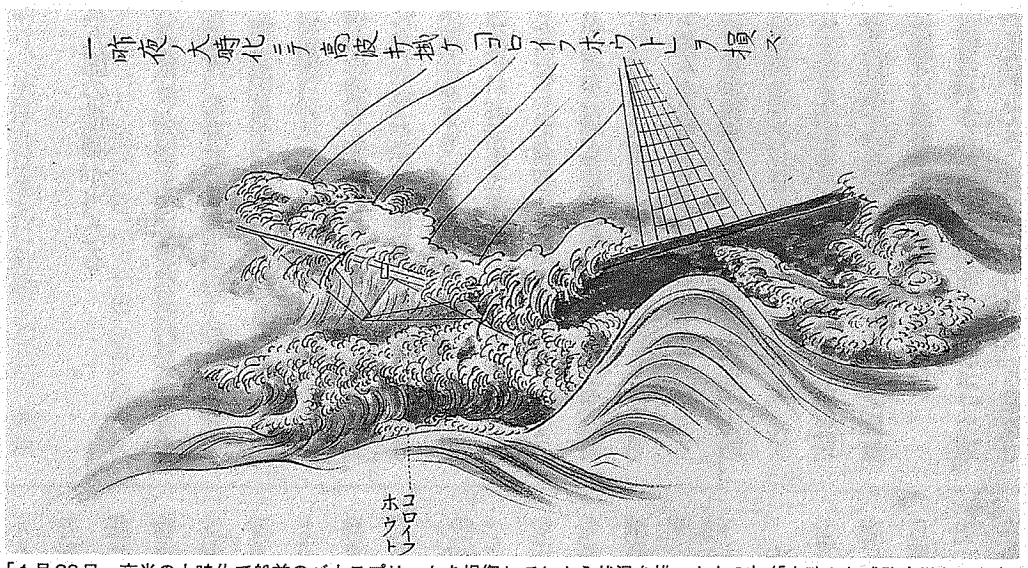
安政7年2月26日午後1時、咸臨丸はサンフランシスコ湾内のレレヨマチという海岸に投錨した。太陽暦に直すと3月17日。38日間（日付変更の関係で37日間）に及ぶ長い航海であった。勝麟太郎の『海軍歴史』に、「この間、晴れた日はわずか七日だけ」とあるから、悪天候の連続だったことがわかる。

日本の軍艦が初めてやってきた、というのでサンフランシスコ港は見物人で溢れた。『奉使米利堅紀行』は、こう書いた。



圖程航洋平太丸臨咸　圖四十七第

咸臨丸太平洋航程図（「幕末軍艦咸臨丸」文倉平次郎著、名著刊行会）



「1月28日、夜半の大時化で船首のバウスプリットを損傷してしまう状況を描いたもの」（「安政七年咸臨丸洋行日録」-早稲田大学図書館所蔵）

市中群をなし、遠望するもの蟻のごとく見えたり。

その日、佐々倉、浜口、吉岡、中浜らはブルック大尉とともに上陸した。ちょん髷に羽織袴姿で晩餐会に出席し、肉料理やアイスクリームという珍しい食べ物を前に、ピアノという聴いたこともない演奏に耳を傾け、そのまま豪華なホテルに宿泊した。乗組員たちも早速上陸して、あたりを歩き回り、日本との違いを肌で実感した。

石造りの家に目を見張り、店に並ぶ近代文明の品々に驚き、派手な服装の女性にウインクされるなど、想像もできない異文化を体いっぱいに吸い込んだ乗組員たちは閏3月19日、帰国のため再び咸臨丸に乗り込む。

この時、勝はアメリカ人を新たに5人雇い入れた。だが復路の航海はきわめて順調で、日本人がすべてをこなした。咸臨丸が日本人だけで太平洋を横断したというのは復路を指したものである。

咸臨丸はハワイを経由して5月5日、浦賀に帰港した。乗組員たちはやがて迎える新しい日本の夜明けの担い手になっていく。

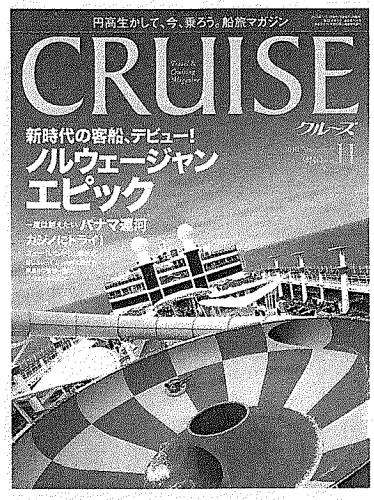
資料提供：船の科学館

●別表（上段カッコ内は現在に直した職名、下段のカッコ内は長崎海軍伝習所入所期）

軍艦奉行	（司令官）	木村摂津守喜毅（二代長崎海軍伝習所長）
教授方頭取	（艦長）	勝麟太郎　（長崎海軍伝習所一期生）
教授方	（運用長）	佐々倉桐太郎（同一期）
同	（運用科士官）	鈴藤勇次郎（同一期）
同	（航海長）	小野友五郎（同一期）
同	（機関長）	肥田浜五郎（同二期）
同	（運用科士官）	浜口興右衛門（同一期）
同	（航海科士官）	松岡磐吉（同二期）
同	（機関科士官）	山本金次郎（同一期）
同	（航海科士官）	伴鉄太郎（同二期）
通弁主任	（通訳）	中浜万次郎（米捕鯨学校卒）
教授方手伝	（航海科士官候補生）	赤松大三郎（長崎海軍伝習所三期生）
同	（機関科士官候補生）	岡田井蔵（同二期）
同	（運用科士官候補生）	根津欽次郎（同三期）
同	（機関科士官候補生）	小杉雅之進（同三期）
操練所勤番公用方		吉岡勇平
同下役公用方		小永井五八郎
医師		牧山修卿
同		木村宋俊
医師門下生		田中秀按
同		中村清太郎
鼓手		齋藤留蔵
同		秀島藤之助
従者		大橋栄次　福沢諭吉
鉄砲方小頭	（下士官）	長尾幸作　氏名不詳
水主小頭	（下士官）	兵吉、実次郎
帆仕立役		仁作、林之助、音吉、好平
水主		政太郎、次作 吉松、清右衛門、善四郎、伊助、源次郎、富蔵、久太夫、梅吉、常三郎、惣八、仁助、大助、幸吉、信吉、庄太郎、清蔵、百太郎、太次郎、角之丞、寅吉、長次郎、福次郎、吉之助、弥重郎、源之助、金右衛門、友吉、辰蔵、九平、宮三郎、国蔵、竹次郎、幸三郎、勘二郎、和三郎、滝蔵、栄吉、松太郎、竹蔵、国太郎、信治郎、伊三郎
大工役		長吉
鍛冶役		菊太郎
火焚小頭		嘉八、小三郎、丸平
火焚		弁之助、伊三郎、国太郎、又次郎、峰吉、紋次郎、竹次郎、滝蔵、藤助、弥蔵、善蔵、三四郎
アメリカ人		ブルック大尉以下11人

名簿は『幕末軍艦咸臨丸』及び『咸臨丸渡米日記』（石川政太郎手記）を基に、咸臨丸子孫の会事務局の調査などを勘案して作成した。本文でも書いたが、数字が2人合わないのは、奉行従者1人、教授方頭取家来1人の氏名が欠落しているためと思われる。

海事プレス社 発行物のご案内



隔月刊
奇数月27日発売
●A4変形判　144ページ
●定価:980円（税込）送料150円

2010年11月号 好評発売中！
一度は越えたい
パナマ運河
初めてのカジノinクルーズシップ
革新的客船
ノルウェージャン エピック
■デザインと"人"の融合 セレブリティ・イクノス
■ニュー「いしかり」命名・進水式
■コスタのアジアクルーズ
■ジャパン・クルーズ・シンポin福岡
飛鳥Ⅱ／にっぽん丸／ぱしふぃっくびいなす

飛鳥クルーズ 20周年記念
進化する飛鳥の未来　10月28日発売
ASUKA CRUISE 20th（仮）
●A4変形判・144ページ　●定価:1,200円（税込）送料150円

Newにっぽん丸のパーフェクトガイドブック
大人を幸せにする客船　発売中
にっぽん丸の歩き方
●A4変形判・128ページ　●定価:1,200円（税込）送料150円

クルーズ2010年9月臨時増刊
フェリーズ vol.10
フェリーを使えば旅は楽しくなる　発売中
●B5判・104ページ　●定価:650円（税込）送料150円

Web CRUISE
ホームページで最新情報CHECK!
雑誌「CRUISE」はもちろん、増刊号、書籍も購入可!
http://www.cruise-mag.com

（株）海事プレス社 販売部
〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-1-15
吉安神田ビル3階
TEL.03-5835-4162
FAX.03-5835-4160
〔販売部〕E-mail：hanbai@kaiji-press.co.jp
Webクルーズ　検索